



凸状に彫る陽刻は、模様以外の木面を掘り下げる作業が必要になり、凹状に彫る陰刻よりも大きな木材が必要になるため、あまり多くは見られない希少なものです。再建の際、あえてこの方式がとられたのは、当時、日本の工匠が近代洋風建築の影響を受け、その技術に対抗するた



上部：臺股彫刻（雍門仙人）、下部：虹梁彫刻（葡萄）西間南側北

虹梁の彫刻には一面につき約三百人、全部で約二千四百人もの人手を要したと記録されています。御修復後に御影堂門から参拝される際には、明治の職人の技が精巧に施された彫刻を是非ご覧ください。 ※山廊―南北両脇に上層にあがる階段を覆っている建物。



欄間彫刻（中間狭間西側の雲水龍）

御影堂門彫刻師一覽		
箇所	部位	氏名
彫刻種 欄間	中間狭間東側	雲水龍 早瀬長兵衛
	中間狭間西側	雲水龍 早瀬長兵衛
	脇間狭間西側	雲水龍 岩倉理八
	脇間狭間東側	雲水龍 早瀬長兵衛
彫刻種 虹梁	東側	雲水龍 早瀬長兵衛
	西側	雲水龍 早瀬長兵衛
	東側	雲水龍 早瀬長兵衛
	西側	雲水龍 早瀬長兵衛
彫刻種 臺股	東側	雲水龍 早瀬長兵衛
	西側	雲水龍 早瀬長兵衛
	東側	雲水龍 早瀬長兵衛
	西側	雲水龍 早瀬長兵衛
	東側	雲水龍 早瀬長兵衛
	西側	雲水龍 早瀬長兵衛
	東側	雲水龍 早瀬長兵衛
	西側	雲水龍 早瀬長兵衛
	東側	雲水龍 早瀬長兵衛
	西側	雲水龍 早瀬長兵衛
	東側	雲水龍 早瀬長兵衛
	西側	雲水龍 早瀬長兵衛

参考文献：『本願寺誌要』（明治44年）
注）臺股彫刻の蝦蟇仙人と上利劍仙人は、実際の配置と参考文献を照合した結果、配置場所が逆になっていたことが判明しました。



御修復のあゆみ

御影堂門の彫刻

一九一（明治四十四）年に再建された御影堂門は、「三間三戸二階二重門」といわれる形式で、三つの柱間（柱と柱の間）に三つの扉が設けられ、二重の屋根をもち、南北面に二階へ上る階段がある山廊が付属した建築様式で建てられています。

この御影堂門には、参拝される方々を通る周辺の壁面や柱・梁などを中心に、美しい「地紋彫」という彫刻が施されていますが、普段目にするのではない細部にまでも、精緻な彫刻がありありと見ることができ

ます。いちばん大きな彫刻は、境内の外を分ける門扉の上の「欄間彫刻」です。中央の門扉の欄間には、長さ七・一メートル、幅一・一メートル、厚み三十六〜四十二センチメートル

の樫が用いられ、迫力ある「龍」の彫刻は目を見張ります。そして両脇の門扉の欄間には長さ五・一メートル（幅、厚みは中央部と同じ）の樫を用いた「雲水」の彫刻が施されています。

一般的な欄間の場合、彫刻は片面のみに用いられるものですが、御影堂門では両面に施されており、欄間彫刻は門を彩る彫刻の中でも象徴的なものです。この「龍」の彫刻は、東側は尾張藩のお抱え彫刻大工であった早瀬長兵衛氏（御影堂再建棟梁・伊藤平左衛門門下）、西側は井波彫刻の番匠屋の岩倉理八氏によるもので、それぞれ装飾性を重視した繊細で上品な意匠と評されています。

その他にも十六カ所にも及ぶ「臺股彫刻」も美しいものです。「臺股」とは、梁の上にあつて上部の荷重

を支えるもので、蛙が足を開いたようなかたちに見えることから、この名がついたといわれます。外から見える場所では比較的装飾が少ないものがありますが、普段なかなか目にするのできかない内部にこそ、仙人（八カ所）や動物類（八カ所）など、より精巧で装飾性の高い意匠がなされているのは驚くべきことです。

さらに驚くべきものとして、「虹梁」の「渦模様」彫刻があります。虹梁とは、梁の一種で虹のようにやや弓なりに上部に曲がっていることからそう呼ばれるもので、外から見える虹梁には渦模様で彫られているのに対し、内側部分には陽刻（浮彫）で「菊・牡丹・椿・枇杷・藤・葡萄・朝顔」などの植物の彫刻が渦状に彫られているのが特徴的です。